The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	時間、風景、理想の生活 ： スペンサーとミルトンの牧歌の研究
Author(s)	藤井, 治彦
Citation	大阪大学, 1973, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/30996
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	藤井治彦（ふじい はるひこ）
学位の種類	文学博士
学位記番号	第 2934 号
学位授与の日付	昭和48年11月20日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**時間、風景、理想の生活—スペンサーとミルトンの牧歌の研究—**
論文審査委員	(主査) 教授 村上 至孝
	(副査) 教授 毛利 可信　教授 田中 健二

論文内容の要旨

この論文はSpenserとMiltonの牧歌の主要な特色を研究したものである。対象として取り扱われている作品は、Spenserの*The Shepheardes Calender, Colin Clouts Come Home Againe, Astrophel, The Faerie Queene*第六巻およびMiltonの*Lycidas*である。

第一章、第二章、第三章は*The Shepheardes Calender*における時間の問題を扱っている。この牧歌集は「暦」という題名が示唆しているように時間の問題と深い関係を持っている。この牧歌集に集められた牧歌は、その最初の注釈者であるE. K. によって「遊憩的（recreative)」「道徳的（moral)」「哀嘆的（plaintive)」の三つのグループに分類されているが、この論文は、この三つのグループの世界を分析し、それが、それぞれ固有の時間構造を持つ世界であることを証明している。

第四章はRenaissance時代の生活理想と*Colin Clouts Come Home Againe*および*Astrophel*の構造との関連を証明している。Renaissanceの思想家達にとって、行動、観想、愛の三つの生活理想のうち、いずれのものが人間に真の幸福を与えるかということは、深刻な関心を寄せるべき重要な問題であった。この三種の生活理想の間の選択は、牧人の生活が、多くの場合、観想的生活と考えられていたために、牧歌と関連する問題となっている。Spenserはこの問題について、上記の二つの詩の中で、独自の回答を与えているのである。すなわち、*Colin Clouts Come Home Againe*では観想的生活が、*Astrophel*では三つの理想を総合した生活が最上の生活とされているのである。さらに彼は、*The Faerie Queene*第六巻でもこの三つの理想の総合の問題を扱っており、第五章は、その問題を中心として、この巻を分析している。

第六章はMiltonの*Lycidas*を取り上げ、牧歌における自然と人間の交感を論じている。この牧歌体挽歌において、牧人が悲嘆と絶望をへて、ふたたび希望を取り戻す過程を進むにつれて、彼を取り巻く自然もまたその相貌を変えている。この論文はその交感を表現するために、詩人が、いかに巧みに

牧歌的風景の伝統と牧歌的心象に伴う宗教的連想を用いているかを分析している。

Miltonの時代を過ぎると牧歌の慣習を理解する読者は徐徐に減少した。第七章は、このRenaissance牧歌の退潮をThomas Wartonの*Lycidas*批評を通して記述している。WartonはMiltonの初期の詩を再評価したが、彼の評価はこれらの詩を生んだ時代の感性とは全く異質の感性に基づくものであった。彼の批評を検討することにより、SpenserやMiltonの牧歌が十八世紀中葉にはいかに理解されにくいものとなっていたかが証明されるのである。

論文の審査結果の要旨

本論文は7章より成り、ルネサンス期に大陸からイギリスに入った牧歌詩の特質を、二大詩人スペンサー、ミルトンの作品を通して究明することに初めの6章を宛て、第七章では、18世紀半ばにこの種の詩が凋落したことを示す一例として、ウォートンの『リシダス』批評を取上げている。題目が示す通り、当時の文化人が考えた理想的生活について、作品に現れる時間と風景とを手がかりとして考察することが、本論文の中心的な作業である。

Ⅰ Moments of Bliss in the Recreative Eclogues of *The Shepheardes Calender*『牧人の暦』の最初の注釈者E.K.がこの詩を構成する12の歌を、「愉楽的」、「道徳的」、「愁訴的」の三種に分けているのに従い、本章ではその第一類に属する三月、四月、八月の歌を検討する。それに先立ち、ヨーロッパ牧歌詩の祖先であるテオクリトスの『田園詩』とウェルギリウスの『牧歌詩』とを一わたり考察し西洋古典文学研究家たちを参照しながら、前者では「怡楽」、後者では「閑暇」がそれぞれ中心語をなすが、互いに似通った風景描写の章句を対照しても、前者のは光に満ちているのに後者のは淡い影が忍びこんでいることに注目する。スペンサーの三つの歌は、単に古人の糟粕を嘗めるものでなく、古典的要素とイギリス固有の要素との融合によって新しいものを作り出そうと努力している。トマリンとキューピッドの出会いを中心として春の再来を讃える「三月」、エリザベス女王の治世を礼讃する「四月」、ペリゴットとウィリーの歌競べと コリン の失恋の歎きとから成る「八月」、いずれも古典文学やギリシア・ローマ神話と当代のイギリス羊飼の生活とを組合せながら、時を超えた幸福を楽しむよりは、時の移ろい易さを意識している傾向が窺われる。

Ⅱ Hierarchy and Cyclic Time in the Moral Eclogues of *The Shepheardes Calender*「道徳的」な5篇の歌は、社会、政治、宗教などに関する寓意詩であるが、まず当時の秩序の思想について述べたのち、それぞれの分析を試みる。「二月」、老羊飼セノットと青年牛飼カディとの対話は、同時に既存の段階組織の弁護でもある。「五月」、禁欲者ピアスと享楽家パリノードとの対話を通して貧欲を戒めたものであるが、裏返せば現状肯定を説いたものである。但しピアスは享楽を否定するのでなく、それは青年や俗人に適し老壮年や聖職者には不適だと言うのである。「七月」、野心と謙虚を対照させたもので、高慢な山羊飼のモレルは丘に坐り、慎しみ深いトマリンは谷蔭を愛する。「九月」、欲に釣られて外国へ行き、遂に自分の羊を悉く失って帰ったディゴンに対しホビノルは、人は自らの置かれた境遇の中で苦難を忍ぶべきだと言う。『牧人の暦』全体古諺を多く利用しているが、殊にこの

歌はそれが28あって知足安分を強調している。「十月」、『牧人の暦』12篇の中でも内容、格調共に秀でたユニークなもの。ピアスとカディは詩人並びに詩の高貴性を主張する。しかし時間の観念では先の四つと共通であり、幸、不幸は円環的にくり返すと見られ、羊飼たちはいま不幸のどん底にあるが幸福の回帰への希望を失っていない。同時代の『為政者の鑑』が全盛の王侯たちに運命の変り易さを警告しているのと比較して興味がある。なお『神仙女王』第七巻「流転の諸章」にもスペンサーの同じ考えが窺われる。

Ⅲ Colin Clout's Meditation upon Inner Time in the Plaintive Eclogues of *The Shepheardes Calender* この類には「一月」、「六月」「十一月」、「十二月」の歌が属する。まずコリンが作者自身だとするE.K.以来の説を反駁し、この名の羊飼が登場するスペンサー以前の作品、マロとスケルトンの牧歌について彼が公的性格を持つことを指摘し、次にフィレンツェの新プラトン派が憂愁は天才の印なりとしてこれを賞讃したことがエリザベス朝のイギリスにも受入れられ、それがこのコリンにも反映していることを明らかにする。愛を寄せたロザリンドに報いられず、コリンはそれまでの歌や、笛や、学問を棄て、ひたすら死と内なる時の流れについて冥想することになる。秋の末に枯れた草は春来れば再び萌え出でて花をつけるが、人は一度死ねば再び帰らない。しかし死者の魂が天に昇って神々の許にあると考えれば慰められる。また、コリンは田夫野人であると同時に宮廷人でありその性格に都ぶりと鄙ぶりとが巧みに融合されている。そして「十二月」は近づく死を前にした達観で終っているが、これはむしろ壮年期を前にした青春との別れを現わしている。

Ⅳ Action, Contemplation and Love in *Colin Clouts Come Home Again* and *Astrophel* ルネサンス期に入ると中世修道院における観想生活に対し行動生活を主張する者が増し、トマス・モアなどは二者の間に迷った形跡がある。しかしこの二つの理想は矛盾するものでなく相補的なものだとする伝統的な考え方があり、アエネアスはその古典的実例であるが、ルネサンス期ではミケランゼロの彫刻が最もよくそれを示している。さらにこれに愛の理想が加わり、この三者を統合し調和させたものが理想像とされ、スペンサーもこの考えに従っている。『コリン・クラウトの帰郷』はさきの『牧人の暦』で見た、愉楽、道徳、愁訴の三要素を同じく含んでいるが、一人の主人公が語る長い詩である点で成長が見られる。コリンが訪れるシンシアの国に対しては素晴しい讃辞が連ねられているが、そのあと宮廷生活の浅ましさが語られており、またコリンの国は地味も痩せ狼の出没する土地であり宮廷、田園共に決して理想化されていない。内容は(1)牧歌的理想、(2)宮廷の理想、(3)宮廷の理想の低下、(4)愛が宇宙を動かす大きな力だと見る新プラトン派の考え、(5)ロザリンド礼讃、の5部に分れ、それらが愛の中心題目で統一されている。愛は田園でも宮廷でも肉感的なものに陥り易く、人は美を通して天上の愛を求めねばならない。この詩ではロザリンドも天上的であり、シンシアも天使である。

『アストロフェル』は、シドニーの死を悼むスペンサー個人の歎きの歌でなく、かような模範的人物像を通して行動、観想、愛の理念を示したものである。観想を表わす羊飼に行動を表わす騎士を採入れることはスペンサー以前にもあったが、両者の結合はこの詩の副題にも示されており、アストロフェルは文、武、徳三拍子揃った人物として描かれる。この詩の結末は彼とその恋人ステラとが死後不凋花になったと神話化しているが、続篇「クロリンダの歌」ではキリスト教思想によって、アストロフェルは天に昇り、いま天国での観想を楽しんでいると歌われている。

Ⅴ The Perfection of Calidore in Book Ⅵ of *The Faerie Queene* この巻の主人公、礼節の騎士キャリドアが上記三つの理想を綜合したものであることを論ずる。初めに出る幾つかの挿話は非礼即ち傲慢、残酷、誹謗の実例を示している。また、礼節は本来宮廷人に具わるものであるが、現在身分は財しくても先祖から高貴の血を受けついでいてこの徳を発揮する例もある。さてキャリドアは美少女パストレラを囲む羊飼の群に会い、「悪口雑言の獣」の追跡をやめて彼らの許に留ることとし、甲冑を脱いで牧人の服を身に着ける。彼は行動生活から観想生活に入ったのであり、また初めはパストレラの外面的美に引かれたが、愛は肉体的なものから霊的なものに高まらねばならず、行動、観想愛の綜合調和の上にこそ礼節の徳は成立することを悟る。この巻によく出る指環、花輪、冠などのイメジ、殊に美の三女神と百人の乙女が輪舞する場面は極めて象徴的である。それは人間関係だけでなく宇宙全体の調和を示している。最後に彼の留守中山賊が押しかけてパストレラを連れ去ったとき、彼は牧人の衣の下に鎧を着けてその隠れがを襲い、彼女を奪い返したあと再び「悪口雑言の獣」討伐に出発する。キャリドアは羊飼仲間との生活を通して人間的に一段と成長したと言える。

Ⅵ The Changing Landscape of ***Lycidas*** 各章句順に細かく分析してゆくが、殊に有名な154-64行については、エリオットやリーヴィスが音調の美のみを賞めているのを斥け、ティリヤードを援用しながら内容の深い意味を探り、テオクリトス流の海を愛する羊飼、ウェルギリウス流の海を恐れる羊飼、この二つが共にスペンサーの『コリン・クラウトの帰郷』に見え、『リシダス』にもそれが受けつがれて、この章句に希望または絶望を見る二説が対立していることを述べたあと、結局ここには二つの意味が重なって含まれているが故にこの章句の偉大さが生まれたと結論する。そして異教、キリスト教いずれにも関連のあるイルカのイメジから、一見神不在の無情な自然の中に呑みこまれたリシダスが神の恩寵によって復活することが暗示される。こうしてキリスト教的な歓喜に溢れた章句のあと再び牧歌の伝統をふまえた８行がこの詩篇全体をしめくくっている。

Ⅶ Thomas Warton's Romantic Interpretation of ***Lycidas*** ウォートンの『ミルトン初期・中期詩集』への序文や注は、新古典派の流行によって忘れられていた虚構、想像、絵画的描写、ロマンチックな心象などの回復を意図したものであった。しかし一面彼は合理的思惟と明晰な文体を尊ぶ新古典派でもあって、その『リシダス』評はルネサンス期牧歌への18世紀中頃の反応を窺うのに恰好の論説である。もともとジョンソンの『リシダス』批難への反論であり、イギリスの伝説や写実的描写を通してこの詩の美を讃えているのはよいが、一つの単語やイメジに複数の象徴的意味を見るとか、この詩の持つ宗教的意義を考えるとかいうことを全くしていない点で、ルネサンス期の感性が当時すでに消滅したことをこの『リシダス』評は端的に示している。

以上が本論文の要旨であるが、その特長は、(1)これまでとかく閑却されてきた領域に踏みこんで研究を進めてきたこと、(2)作品の一語一句にも周密な検討を加えつつ全体の意味を捉えようとしていること、(3)それによって牧歌詩というジャンルが英文学の中でどういうはたらきをしたかを究明したことである。

(1) テオクリトスに始まりウェルギリウスに受けつがれたヨーロッパ牧歌詩の流れを概観した研究はイギリスにも二、三あるが、スペンサーからミルトンというルネサンス期牧歌詩に限ってこれを深く掘り下げたのは本論文が初めてである。題目だけ見れば簡単なようであるが、この研究の基盤として

一つには西洋古典語の知識が要求され、また一つには詩人スペンサー並びにミルトン全体への理解と共感が必要である。清教徒の代表たるミルトンはさておき、スペンサーはその長篇『神仙女王』が中世ロマンスに則った寓意詩であり、その表現も現代英語とかなり距っているため、同時代人シェイクスピアの研究書が汗牛充棟であるに比べ、スペンサーに関するものは英米においても極めて限られている。殊にその牧歌詩については、単に詩人の夢想郷を歌ったものという軽い意味に受取って、作者の世界観をここに読みとろうとする試みはほとんどなされなかった。ミルトンの『リシダス』については近年優れた研究が出ており本論文の筆者もその恩恵を受けているが、両詩人の牧歌詩を結び合せて時の観念、愛の思想が古代異教的なものからキリスト教的なものに移ったことを明らかにしている点は大きな功績である。

(2) 『牧人の暦』については早くからE.K.の優れた注釈があり、本論文の筆者もこれを活用しているが、例えば槲の老樹を敵視してこれを伐採させたため自らも枯死する野バラについて、それが持つ様々な意味を挙げている。この方法は本論文を通して一貫しており、『リシダス』に出るイングランド西南部とスペイン北部との地名からアルマーダの再出現を否定し新教国家イギリスを祝福する裏の意味を探っているのも興味深い。そしてこのような緻密な分析が、各詩篇全体を貫く思想の正しい理解を確実なものにしている。

(3) 牧歌詩は一見のどかな牧人の生活を描いたものにすぎないが、観想生活、行動生活という古くから対照させられた人間の生き方について作者の考えを盛ったものであり、これがルネサンス期イギリスにおいて形式は定型を踏襲しながら内容的に独自のものを生み出した。スペンサーは中世騎士道精神の導入によって両生活を綜合すること、さらに宮廷、田園のいずれを問わず神々の愛に至ることを究極の理想とした。ミルトンも親友の不慮の死を悼むのに牧歌詩の形式を借りながら、天国における永遠の時間への参与に救いを見出し、キリスト教信仰の歓びをひそやかに歌っている。本論文はこうしたイギリス牧歌詩の特徴を動的に捉えて明快に展示しているのである。

ところで、本論文の筆者はスペンサー、ミルトンの作品を詳細に考察し、最後にウォートンの『リシダス』評を通して18世紀中葉における牧歌詩の衰退を見ているが、ドライデンのテオクリトス英訳はともかく、フィリップス、ポープ、ゲイなどの牧歌詩、またウォートン自身をも含めて18世紀スペンサー派の作品をも取上げて、17世紀末から18世紀半ばに至る詩作品そのものを検討すればさらに充実したものとなったであろう。また欲を言えばスペンサーの同時代人シドニーのロマンス『アーケディア』を併読してエリザベス朝における牧歌観の傍証としてほしかった。またウォートンを取上げるからには彼のさらに有名な『「神仙女王」論』によって18世紀とスペンサーとの関係を論ずべきであろう。なお、本論文の初めはやや解説書的論調に傾いており、いま少し早く論点を整理することが望ましい。筆者が論題に直接、間接関連した書物を普ねく渉猟したことは多とするが、巻末の参考書目は単に著者名のアルファベット順とせず、作品、スペンサー論、ミルトン論、牧歌詩論、時代背景論等々に分類する方が読者に親切であり、また自身の論文はすでに本論文中に採入れている以上、序文の中でその旨一言するに留めるべきであろう。英文は文体においてやや淡白にすぎるが明快かつ達意の文であり、文法上の誤りはなく、ただ時たま誤綴とミスプリントのあるのが惜しまれる。

以上多少不備の点もあるが、それらは本論文全体の価値を引下げるものではない。英語で書かれた

ことは、これが直ちに海外学界にも紹介されることになるが、広く英文学研究者の間に一つの新しい寄与を加えるものであり、文学博士の学位請求論文として十分その価値があるものと認定する。